

必須アミノ酸やビタミン&ミネラルが豊富！健康でサステナブルな地球のための選択

ベジィ
vol.101

楽しむウェルネスライフ

veggie



Plant-Based Protein

植物性 タンパク質



セレンディップトラベル

SERENDIP
TRAVEL

岐阜：自然と歴史が息づく場所

西川榮郎 Nishikawa Hideo

オルター代表

1947年、大阪市生まれ。立命館大学大学院理工学研究家修士課程修了後、大鵬薬品工業中央研究所主任研究員として、制癌剤の開発研究に携わる。大阪大学医学部胸部外科で「癌と免疫」を研究。1976年、安全な食べものの共同購入運動「徳島暮らしをよくする会」を創設。ロングライフミルク追放、パスチャライズ牛乳の実現、市民運動サミット「ばななぼうと」を主催。脱原発、薬害告発、農薬空中散布中止など、「いのち・自然・暮らし」を守る幅広い運動に取り組んできた。現在、オルター代表として安全な食材開発の最先端にいる。著書に『ほんものの牛乳が飲みたい』『あなたのいのちを守る安全な食べものの百科——食は「いのち」』1巻～4巻がある。



オルター・西川榮郎代表が本誌初登場！ 現代社会は、食の安全だけでなく 「電磁波の脅威」への対応が必須

今年で発足から50年を迎える、日本一安全な食材を宅配する「オルター」。50年に渡って“日本の食の安全”を守り続けてきた、代表の西川榮郎さんが本誌初登場！現代日本の「食の安全と心身の健康」に警鐘を鳴らすインタビューをお届けします。その鍵を握る重要なテーマは「電磁波」への対策にありました。

写真／竹内進岳 インタビュー・文／編集部

オルターが歩んだ50年

オルターは2025年で50周年を迎えます。徳島市にて「徳島暮らしをよくする会」を発足したのが始まりです。設立された1975年は、その年の夏に発売された有吉佐和子の小説『複合汚染』がベストセラーになり、さらに水俣病やイタイイタイ病についての報道も後を絶たず、「公害」や「環境汚染」が社会問題になっていた時代でした。私は大学時代に化学を学び、大学院では生物化学を研究し、就職した製薬会社や大学の研究室では癌の免疫療法に取り組んでいたのですが、その時に食品公害の実態を目の当たりにしたのです。折しも長男が誕生したこともあり、「子供に食べさせられる食べものがない」と絶望していたことも大きなきっかけとなりました。

オルターが歩み続けたこの50年で、日本でも有機は浸透したと言えます。ただ、現代はそういった時代背景は過去のものとなり、「とりあえず有機と謳っておけばいいだろう」という商品が溢れています。私はこれを「なんちゃって有機」と言っています。国が認めた有機認証であっても、狂牛病で問題になった肉骨粉や鶏の羽、動物の死骸や不可食部位を処理して加工するレンダリングプラントから出る廃棄物

オルターの 揺るぎないポリシー

日本一高い安全基準 「西川スタンダード」

- 野菜は原則無農薬のみ
- 汚染のない海域での魚介類・えさと飼い方の安全性を確認した畜産品
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物を徹底的に排除した加工品

上記により、他の宅配団体、自然食品店とは一線を画した高い安全基準の品物のみを提供。取扱品はすべて「西川スタンダード」によって厳選し、その情報をカタログ誌面などで公開しています。

すべての生産情報を 公開

「誰が・どこで・どのようにつくったか」の情報をすべての品物について必ず公開。また、生産工程や使用した原材料など、きちんと情報が確認できる品物を扱い、必要に応じて情報が遡れる仕組みを構築しています。

どこよりも厳しい 放射性物質検査基準

オルターの放射能防衛ラインは1Bq/kgです。オルターは、1986年のチェルノブイリ原発事故以来放射能汚染の心配のない食べものの確保に取り組んできたおそらくは唯一の団体です。福島第一原発事故以降もその方針は変わりません。

などを使用することを許可しています。そのように、野菜にとつては何も良いことがない、肥料にならないものを与えられて育った作物を有機と呼称しているのです。

私たちがこういう活動をはじめた時に使用していたものは堆肥でしたし、昔の古代農法は畔の草や山草、落ち葉などを使っていました。そういうものが採れる田圃ほど高い価値があったわけです。それが今のように有機認証マークのついた肥料を購入する時代に変わっていったわけですが、「有機の中身」もまた変化しているのです。そんな時代のさなかでオルターは50周年を迎えましたが、言っていることは50年前と同じであり、それだけの時が流れてもオルターの考えは不変なのです。50年前には存在しなかった、遺伝子組み換え作物やゲノム編集作物、種の放

射線育種にも一貫して反対しています。

食の安全の真髄

赤ちゃんにほうれん草を裏ごししたものを与えたところ、顔色が真っ青になって死に至ったというアメリカで起きた「ブルー・ベビー事件」もあるため、肥料の過剰摂取の問題はとりわけ注意しています。これは、野菜に含まれる高濃度の硝酸塩が原因であり、化学肥料を多用する栽培で生じやすいものです。WHOは硝酸塩の単独致死量を4000mgと定め、1日の許容摂取量(ADI)は体重1kgに対し3.7mg(体重50kgだと185mg)と定めています。東京都は長期間にわたり野菜の硝酸塩を検査していますが、これまでの最大値はチンゲン菜16000ppm(mg/kg)でした。このチンゲン菜を

250g(1株半)を食べると致死量に達するのです。市販の野菜でも5000ppmレベルはザラにあります。

オルターでは取り扱いのある野菜の生産者全ての硝酸イオンを常時モニターしています。オルターの野菜の硝酸塩濃度は、「葉菜類は1000ppm以下、芽野菜・花野菜は200ppm以下、果菜類・根菜類は100ppm以下、山菜は50ppm以下」を目標値に設定しているのですが、ほとんどの生産者はこの基準内に収まっています。仮に2000ppmを超えてしまった場合は教育的指導を行い、ヨーロッパ基準の5000ppmを超えるものがあれば出荷停止措置を取ります。オルターでは、野菜を1日500gを食べるように推奨しています(葉物・根

ルネサンス vol.13 特集 食がもたらす“病”

定価:980円(税込)

発行:ダイレクト出版

“日本国民の情報リテラシーを上げることで、長引く低成長から脱却。未来への希望があふれる国をつくる。”をビジョンに掲げる雑誌『ルネサンス』のvol.13では、西川社長が「オルタナティブ・ライフのための安全な「食品選び」ガイド」を寄稿。塩や醤油、砂糖といった調味料から、米や野菜、小麦などの選び方を完全解説されています。



オルター 食べもの百科 『食はいのち』シリーズ

著者 西川榮郎

価格 各3,000円(税込)

※1巻のみ2,750円(税込)

オルターが発行している週刊カタログ「ほんものをたべよう」のアンソロジーシリーズは、現在4巻まで発行。毎号350ページを超える圧巻のボリュームで、1巻は「偽装などもってのほか」、2巻は「ほんものをたべよう」、3巻は「健康になろう」、4巻は「食の達人大会」というタイトルになっています。

菜・海藻・こんにゃくなども含め)。しかし、これはあくまでもオルターで取り扱う野菜であることが前提で、硝酸塩やO157を管理できていない有機野菜や慣行栽培野菜を食べる際には注意が必要になります。野菜を食べること、とりわけ生野菜を食べることは気をつけないといけない時代でもあるのです。単に有機認証を取得した野菜というだけでは、どのように作られているかまではわかりません。適切な肥料管理を行い、丁寧に野菜を育てている生産者を探すようにしましょう。

「食の安全」とは、単なる農薬を使わない、化学薬品や添加物を使わないというだけではなく、自然な食べものに含まれる自然毒も正しく処理してこそ初めて言えることなのです。だからこそ、「なんちゃって有機」のものを食べ、「なんちゃって調理」で料理をしたものを食べて「自分は健康だ」と思っている人が、実は病気になってしまっているというケースが多いのです。オルターは、多くの人が病気になっっているという「事実」から出発して、その原因は何なのか、何が間違っていたのか、どんな生活習慣をおくっていたのかについて向き合い考えることを訴えています。オルターという社名は「もう一つの」を意味する「オルタナティブ」が由来です。つまりは代

案のこと。オルターは消費者の皆さんが困っていることに対してすでに対策を練り、野菜やお米、調味料、卵や畜産物や魚・海産物などすべての面において安全なものが用意されています。単なるアンチとして「〇〇は危ない」と喧伝している団体ではなく、そういうものに対してオルターとして安全な選択肢を提供しています。

電磁波の脅威を防ぐため

50年前と現在では何よりも食生活が変化しました。海藻や野菜を主食にしていた時代は、がんは今のようによくはありませんでした。体内がアルカリ性を保っているのが細胞も育ってはいかないのですが、穀物や肉を食べ過ぎると体液が酸性化してしまい、活性化していきます。小麦などの穀物の摂取量が増えていき、食生活がアルカリ食から酸性食になったことで、日本のがん患者は急速に増加していきました。実際、1981年にがん（悪性新生物）による死亡率がトップになり、その3年後の1984年に厚生省による本格的ながん対策がスタートしたのです。それが今では、がんは2人に1人がなる病気になってしまっています。糖尿病は予備軍を含めると5人に1人という割合です。国家が衰退するような病

気が増えていのに、対策はまったく取られていないに等しい状況で、国民が自衛するくらいに方法がないというところまで来ています。そうしないと、ほとんどの人が病気になるかならないかの瀬戸際に立たされていると言っても過言ではありません。ただでさえそのような状況なのに、一気に奈落の底に落とそうとしてくる存在が「電磁波」なのです。

ひと昔前ならば電化製品に気をつければ電磁波の問題はクリアできていたものが、現在は5Gが家庭に届いている脅威の時代のため、家にとってもその被害にさらされています。高容量高速のWi-Fiが家庭内にある人は危ないわけです。その状況に対応するためには、電磁波対策を行う必要があります。オルターではリトスジャパンの「リトスセラミック コンセントシリーズ」を扱っています。実はこの商品をオルターで扱うに至るまで、3年かかりました。まずは自分たちで試すことから始めて、メーカーの説明にあったように電気代が下がることは1年以上に確認できました。大きな冷蔵庫を入れていたオルターの倉庫の電気代、1ヶ月150万円だったものが105万円になりました。さらに、試用期間中にある大学の研究機関が

写真は大阪府南河内郡の千早赤阪村にあるオルター本社の事務所。各種セミナースペース、直営オーガニックカフェや展示即売所、調理室を備えた広大な本社を電磁波から守っているのが、コンセントに設置された「ゼンティグリス」です。

